

堆肥入りの肥料で地力の回復に期待する
小倉さん（埼玉県加須市）

家畜ふん堆肥を巡る状況

現状

- ・家畜ふん発生量の86%は堆肥などに活用されている
- ・水田への堆肥施用量は30年で4分に1に

課題

- ・散布の負担が大きい
- ・畜産農家が偏在し入手しにくい地域も

利用拡大・定着の鍵

- ・ペレット加工し広域流通、散布を容易に
- ・長期的に作物の収量、品質安定につながる利点を普及

家畜ふん堆肥の利用拡大へ、農研機構九州沖縄農業研究センターの荒川祐介氏は「効果的には収益に結び付けていくが、長期的には、有機物を微生物が分解して土中に細かな土壌の粒ができる」と指摘する。ペレット資材も含め、堆肥は家畜ふんや植物の繊維などの有

機物が供給できる。短

期的には収益に結び付けていくが、長期的には、有機物を微生物が

肥料価格の高騰が続

いている。国内にある

資源を肥料に生かす取

り組みについて、普

及、定着の課題を探

から農業面）

地力向上し収量安定に

（川崎勇）

肥料自給 これで強化

まきやすく広域流通も

堆肥入りペレット

埼玉県加須市で水稻など57haを栽培する小倉祐一さん（42）は3月、肥料成分や有機物を水田に供給するペレ

ット状の資材を初めて使

て省力的。臭いも気に

ならない」という。

農水省によると、2

0年を100とした指

数で15%で、前年同

月を4割上回る。輸入

に大きく依存する肥料

原料のリン安や塩化カリの高騰が主因。こう

上につながる有機物の

補給へ、採用したペレ

畜ふん堆肥への注目が高まっている。小倉さんはリンやカリの成分量を抑えた安

価なL型肥料への切り替えて、肥料費の圧縮

を目指す。一方、減ら

した分のリン、カリに

イ酸8%などで、10kg

当たり50kgを計4袋に

散布した。

省によると、家畜

が、近隣に入手可能な

だ。1袋（15kg）当た

4分の1に減った。

小倉さんも、牛ふん

堆肥の施用を考えた

が、近隣に入手可能な

だ。1袋（15kg）当た

4分の1に減った。

稻サボを製造する朝

日アグリヤは、牛ふん

堆肥を群馬や埼玉県の

畜産農家から仕入れ

た。21年に開発して以

降、埼玉や茨城、千葉

散布機を持っていない

といつた関東圏に加

え、新潟などでも利用

が広がる。

00万t（2020年）発生し、86%が主に堆肥として活用されている。一方、稲作地帯は畜産農家が少ないなどで水田への堆肥の施用量は15年までの30年間で

農業機械による堆肥の施用

は、これまでの30年間で

肥料として活用されてい

た資材は、堆肥では

難しかった広域での流

通や、従来の散布機の

活用も可能になる。